



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

「英文読解・表現法」の目指してきたもの：Cultural Literacy in English に絡めて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 太一郎, Minami, Taichiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5445

「英文読解・表現法」の目指してきたもの

-----Cultural Literacy in English に絡めて-----

南 太一郎

What “Methods of Reading and Expression in English” Has Aimed At

-----In Connection with “Cultural Literacy” in English-----

Taichiro MINAMI

I. はじめに

「英文読解・表現法」は、カリキュラム改正によって平成 20 年度から新たに中学校教育コース英語主専攻の 1 年前期専門科目として開講された科目であったが、後に詳述するように従来の英語専門科目とは些か趣を異にする科目設定がなされた。週 2 回で半期実施という開講形態もそうであったが、何よりも大学の専門科目としては、その科目区分や内容が「英語学」の 1 科目であるという専門的位置付けを多少とも犠牲にして、というよりは、一層博く取って、高校までの英語学習と大学での専門科目での研究との架橋的科目として、他の専門科目での文献講読（或いはそれ以降の卒業後における英語との関わりも）に繋がるべき技能修得を目指す、というものであったことに最も佳くその性格が表れていると思われる。

大学の開講科目は飽くまでもアカデミックな内容を取り扱うべきである、という狭い専門性からの観方によれば（決してそれを全否定するつもりはないが）、この科目は如何にも邪道的に見えるだろう。しかし、開講初年度以前から、入学してくる英語専攻の学生達（だけでは勿論ないのだが）の英語力（読解力だけではなく、総合的な意味での英語を理解し操ることの出来る力）が次第に低下してきていることを強く感じていて、何か抜本的なテコ入れをしなければ次第にジリ貧状態に陥り、現場で使い物にならないか或いは指導書に基づいた一応のことはこなせたとしても、実は表には出ないが背後で英語教師を支えてくれている堅固な英語理解と英語的教養に根差した教科指導力を持った英語教員を養成することにはならないのではないかと、という危惧のような想いを懐いてきていたので、非力極まりない英語教師でしかない現筆者だが、是非一つの試みとして挑戦してみようと踏み出した訳である。ここには例えば長年現筆者が私淑している古典学者 Gilbert Highet の *The Art of Teaching* における教師論や後述する E. D. Hirsch, Jr. らの唱える “Cultural Literacy” という概念や知識の重要性といった理想的背景がその支えになっていることは否めない。又、英語習得の技術論的背景としては古くは林語堂 (Lin Yutang) の『開明英文文法』やその表現文法的考え方を踏まえた國弘正雄氏の只管朗読・只管筆写といった英語学習・習得論、更に後に挙げるが、受験参考書として執筆されている

が素材英文の扱い方や書物の視野や展望が単なる受験参考書の域を遥かに超えて普遍的とも云える高みにまで達している佐々木高政氏の『新訂 英文解釈考』における英文の解釈法を語って同時に表現法にも目配りを怠らないという説き方や方法論が現筆者を後押ししてくれたと云っても過言ではないであろう。

本稿では、先ず「英文読解・表現法」という科目の概要を示すところから議論を始め、次に E. D. Hirsch, Jr. の主張する “Cultural Literacy” という概念を簡単に概括し、「英文読解・表現法」との絡みで英学徒にとっての Cultural Literacy in English という視点の重要性に説き及ぼうと思っている。

II. 「英文読解・表現法」の概要

1. 平成 20 年度

先ず学務システム上にアップしたシラバスの基になった文案から、以下に初年度の授業概要及び授業計画の前文を掲げる。授業計画の具体的詳細は後掲する初回授業時に学生に配布したシラバスを参照のこと。

●授業概要：

以下の到達目標に掲げた項目を念頭に学習して行くことを通して、中学校 1 種及び高等学校 1 種（英語）を十全に教授するに必要な不可欠な英語学的素養を身に付けさせることを主眼とする“容赦のない英語修業”科目である。

高校までの英語学習と大学での専門的な学習への架橋の科目という位置付けの入門科目ではあるが、大学以降実社会で通用するというのも当然念頭に置いて授業を進めて行く。英文をより良く味読し、また英語で自己や周りの事象を十分に表現することが出来るための、英語力における実質的な「足腰の強化」を目指している。

●授業計画：

龍口直太郎『新訂版 英文解釈読本<応用編>』を用いた、英文解釈力の補強を学期中を通して順次進めて行くと共に、佐々木高政『和文英訳の修業（四訂新版）』の「予備編：暗唱用基本本文例集」500 題（+練習問題約 490 題）を用いた徹底的反復練習による英文内在化の訓練（英文インプット[暗記・暗誦]の徹底を図ること）、及び佐々木高政『新訂 英文解釈考』による音読を基本とする英文味読や意味内容と英文構造・表現形式との密接な関係の体得・感得ができる能力を涵養する様に授業を有機的に組み立てたいと思っている。

又、「江川泰一郎『英文法解説（改訂三版）』を学期中折に触れて参看させ、文法概念の定着をも図りたい。

更に、その他の項目は以下の通り。

●到達目標：

- ・英語で日常一通りのことが表現出来るための、文法を下敷きにした英文解釈力の伸長及び英文インプット（暗記・暗誦）の徹底を図る。
- ・常に表現を意識しつつ表現との絡みにおいてコクのある英文を分析・読解し味読する。
- ・自分の英文を自ら正しく添削し、よりコンパクトで引き締まった文体の英文が書けるレベル

の階（きざはし）に立つことを目指す。

●成績評価方法：

- 1) 準備を含めた授業のための課題作成・提出・・・0%～10%
- 2) 暗記確認小テスト（週2回）・・・50～60%
- 3) 最終課題レポート或いは試験・・・40%

●文献・教材：

- 1) 龍口直太郎『新訂版 英文解釈読本<応用編>』（開隆堂出版）
- 2) 佐々木高政『和文英訳の修業（四訂新版）』（文建書房）
- 3) 佐々木高政『新訂 英文解釈考』（金子書房）
- 4) 江川泰一郎『英文法解説（改訂三版）』（金子書房）[授業外の課題としても併用する]
- 5) 随時追加のプリント教材

参考書：

佐々木高政『英文構成法（五訂新版）』（金子書房）；綿貫陽・マークピーターセン『表現のための実践ロイヤル英文法』（旺文社）

●履習上の注意

繰り返しになるが、上記の通り高校までの英語学習と大学での専門的な学習・研究への「架橋的科目」という位置付けではあるが、大学以降実社会で通用するということも念頭に置きながら、英語力の実質的な足腰強化を図る「千本ノック」の訓練演習科目になる予定なので、受け身の態度ではなく、積極性を持つと共に相当のシゴキを覚悟して臨んで貰わないと抑も受講する意味がない。厳しい課題であれ要求であれ基本的に指示されたことは素直に聞き、実行するという真摯な態度も要求される。授業は1年前期のみだが、週2回の積み上げの練習を続けるので、毎回の受講・出席は義務となる（唯、勿論出席しただけで単位が取得できるという訳ではない）。又、授業だけでなく、課外・自宅においても積極的に英語を内在化する努力を惜しまず続けて行く覚悟も必要である。テキストもかなりの内容のものを最低4冊は使用するし、それ以外の参考書も推薦する。一生もののテキストなので、是非投資を惜しまず全て手元に置いて折に触れて利用して貰いたい。復習は当然のこと、予習も辞書を首っ引きで引いて来るのが授業の前提で、とにかくあらゆる面で食欲に英語と取り組むことが求められる。生半（なまなか）な気持ちで履修することは厳に謹むこと。詳しいことは別途初回の授業で渡す予定の個別科目シラバスに沿って説明する。"Strike while the iron is hot!"

以上の内容を前提として実際に授業初回に学生達に配布したシラバスを表1として以下に掲げる。上記の要点等も盛り込み、4つの教科書を並べて具体的授業計画を示している。

表1 平成20年度 中学校英語主専攻【英文読解・表現法】科目シラバス（担当：南 太一郎）

	教科書 1	教科書 2	教科書 3	教科書 4
第1回 4/11 (金)	本授業の進め方、英語の勉強法他、概論 (Introduction)			
第2回 4/14 (月)	『新訂版 英文解釈読本<応用編>』No. 1～No. 4 解釈訳読作業	『和文英訳の修業（四訂新版）』基本文例集：I～IIの徹底的反復練習による英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三版）』の左記テキスト相当箇所参照

第3回 4/18 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 5~No. 8 解釈訳読作業	基本文例集：I~IIのチェ ック及び基本文例集：III~ IVの徹底的反復練習による 英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第4回 4/21 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 9~No. 12 解釈訳読作業	基本文例集：III~IVのチェ ック及び基本文例集：V~ VIの徹底的反復練習による 英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第5回 4/25 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.13~No. 16 章解釈訳読作業	基本文例集：V~VIのチェ ック及び基本文例集：VII~ VIIIの徹底的反復練習による 英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第6回 4/28 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.17~No. 20 解釈訳読作業	基本文例集：VII~VIIIのチェ ック及び基本文例集：IX~ Xの徹底的反復練習による 英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第7回 5/2 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.21~No. 24 解釈訳読作業	基本文例集：IX~Xのチェ ック及び基本文例集：XI ~XIIの徹底的反復練習に よる英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第8回 5/9 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.25~No. 28 解釈訳読作業	基本文例集：XI~XIIの チェック及び基本文例集： XIII~XIVの徹底的反復練 習による英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第9回 5/12 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.29~No. 32 解釈訳読作業	基本文例集：XIII~XIVの チェック及び基本文例集： XV~XVIの徹底的反復練 習による英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第10回 5/16 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.33~No. 36 解釈訳読作業	基本文例集：XV~XVIの チェック及び基本文例集： XVII~XVIIIの徹底的反復練 習による英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第11回 5/19 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.37~No. 40 解釈訳読作業	基本文例集：XVII~XVIIIの チェック及び基本文例集： XIX~XXの徹底的反復練 習による英文内在化の訓練		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第12回 5/23 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.41~No. 44 解釈訳読作業	基本文例集：XIX~XXの チェック及び『和文英訳の 修業（四訂新版）』基礎編： 1「主語について」の検討		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第13回 5/26 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.45~No. 48 解釈訳読作業	基礎編：2「動詞について」 の検討		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第14回 5/30 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.49~No. 52 解釈訳読作業	基礎編：3「修飾語句につ いて」の検討		『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第15回 6/2 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.53~No. 56 解釈訳読作業		『新訂 英文解釈考』： I「文」の構造→音読・ 味読	『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第16回 6/6 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.57~No. 60 解釈訳読作業		I「文」の構造（継続） →音読・味読； <u>暗唱チ ェック</u>	『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第17回 6/9 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.61~No. 64 解釈訳読作業		I「文」の構造（継続） →音読・味読； <u>暗唱チ ェック</u>	『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照
第18回 6/13 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No.65~No. 68 解釈訳読作業		I「文」の構造（継続） →音読・味読； <u>暗唱チ ェック</u>	『英文法解説（改訂三 版）』の左記テキスト相当 箇所参照

第 19 回 6/16 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 69～No. 72 解釈訳読作業		II 「文意」の織りなし →音読・味読; <u>暗唱チ ェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 20 回 6/23 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 73～No. 76 解釈訳読作業		II 「文意」の織りなし (継続) →音読・味読; <u>暗唱チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 21 回 6/27 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 77～No. 80 解釈訳読作業		II 「文意」の織りなし (継続) →音読・味読; <u>暗唱チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 22 回 6/30 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 81～No. 84 解釈訳読作業		II 「文意」の織りなし (継続) →音読・味読; <u>暗唱チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 23 回 7/4 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 85～No. 88 解釈訳読作業		III 「叙述の様式」と「修 辞」→音読・味読; <u>暗唱 チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 24 回 7/7 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 89～No. 92 解釈訳読作業		III 「叙述の様式」と「修 辞」(継続) →音読・味 読; <u>暗唱チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 25 回 7/9 (水)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 93～No. 96 解釈訳読作業		III 「叙述の様式」と「修 辞」(継続) →音読・味 読; <u>暗唱チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 26 回 7/11 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』No. 97～No. 100 解釈訳読作業		III 「叙述の様式」と「修 辞」(継続) →音読・味 読; <u>暗唱チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 27 回 7/14 (月)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』解釈訳読作 業 (予備)		IV 「叙述の展開」→音 読・味読; <u>暗唱チェッ ク</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 28 回 7/18 (金)	『新訂版 英文解釈読本 <応用編>』解釈訳読作 業 (予備)		IV 「叙述の展開」(継 続) →音読・味読; <u>暗唱 チェック</u>	『英文法解説 (改訂三 版)』の左記テキスト相当 個所参照
第 29 回 8/1 (金)	「総まとめ授業」乃至は「最終試験①」(或いは試験代替評価作業)			
第 30 回 8/4 (月)	「総まとめ授業」乃至は「最終試験②」(或いは試験代替評価作業)			

・授業の概要：高校までの英語学習と大学での専門的な学習への架橋的科目という位置付け(及び大学以降実社会で通用するという点も念頭に置く)で、英文をより良く味読し、また英語で自己や周りの事象を十分に表現することが出来るための、英語力における実質的な「足腰の強化」を図る訓練修業(通称「英語の千本ノック」)科目である。**如何なることがあっても歯を食い縛ってこの修業に喰らいつき耐え抜くこと。**

・テキスト：1) 龍口直太郎『新訂版 英文解釈読本<応用編>』(開隆堂出版)；2) 佐々木高政『和文英訳の修業(四訂新版)』(文建書房)；3) 佐々木高政『新訂 英文解釈考』(金子書房)；4) 江川泰一郎『英文法解説(改訂三版)』(金子書房) [授業外の課題としても併用する]

・推薦参考書：1) 綿貫陽・マークピーターセン『表現のための実践ロイヤル英文法』；『表現のための実践ロイヤル英文法 問題演習』(旺文社)；2) 佐々木高政『英文構成法(五訂新版)』(金子書房)

20年度は、初年度であるということで担当者の意気込みも相当にありメニューも盛り沢山になっている。只、先取りして云うと、その後、年度を追う毎に指定教科書の数は精選というか減ってゆくことになるのだが、その辺りの事情は、科目の性格や学生の対応能力との絡みもあるので、年度を追いながら後述する。少なくとも初年度に関しては上記の理念と内容で授業を

実施した。

授業は、教科書 1 (『新訂版 英文解釈読本<応用編>』) を中心に、文法事項に従って配置された章毎の枠内の雛形英文とその簡潔な説明を踏まえての解釈問題の演習及び第 2 回以降は教科書 2 (『和文英訳の修業』) の基本文例集の短文の暗記チェックを行なって記憶定着を図ると共に、教科書 4 (『英文法解説』) を必要に合わせて授業中に参照させて出来るだけ教科書間の有機的な連携を図るよう努めた。学期途中からは教科書 2 の基本文例集が終わった時点で教科書 3 (『新訂 英文解釈考』) に切り替え、かなり早足になってしまったが、更に高度な英文の理解や味読の域に達するための感覚を養わせようと試みた。

こうした演習を行いつつ、表 2 に掲げる学期末提出に向けた課題作業を指示し、その為の準備を促した。

表 2 最終評価課題に向けた作業指示内容

<u>「英文読解・表現法」最終評価課題に向けて</u>	
	7 月 14 日
1.	7 月 18 日 (金) までに、課題英文 (『Human Life : A Poem』) の自分なりの和訳を完成させる。
2.	7 月 22 日 (火) ~8 月 3 日 (日) までの間に、その和訳を元に出来るだけ多くの回数英訳を試みる。 <u>*原文段落は 2 つしかない</u> ので、訳文及び各英訳文毎に文頭に番号 (①②③、etc) を付し、両者の対応を図っておくこと。
3.	英訳を行う度に原文と突き合わせ、何処がどう違うのか、違いは誤りなのかバリエーションと考えられるのか、自分なりに添削作業を日記風 (working log) に綴る (=作業日の日付、毎回の作業時間等を書き出す)。
4.	その作業全体をレポートとして <u>8 月 4 日 (月) 午後 1 時まで</u> に一綴り教員研究室ポストに提出する (薄手のノートに作業するのが望ましい)。
5.	最終評価は、この作業とこれまで授業中に行った『和文英訳の修業』の小テストを合算し、総合判定により出すものとする。但し、今回の作業は、これまでの修業の総決算だという位置づけにするので、今回の作業を重視する。
	以上

付言すると、「Human Life : A Poem」は、以下に掲げる通り 20 世紀前期から中期に文筆活動で名を馳せた中国の文人林語堂 (Lin Yutang) の著わした随筆集 (*The Importance of Living*) から採った一節である (紙幅の都合で初めの数行のみ以下に掲げる)。この文章を先ず学生が和訳し、その自分の訳に基づいて時をあげて英文を復元する試みを行なう。そして、それを原文と付き合わせて自己添削し、それに基づいて再度英訳を試み、この過程を出来るだけ多く何度か行ないながら英文のニュアンスを確かめ英文感覚を養うのが狙いである。かつて B・フランクリンが『自叙伝』の中に綴っている文章修行として *The Spectator* を模範に行なった方法にヒントを得てそれを部分的に真似たものである。

VIEWS OF MANKIND: V. HUMAN LIFE: A POEM

I think that, from a biological standpoint, human life almost reads like a poem. It has its own rhythm and beat, its internal cycles of growth and decay. It begins with innocent childhood, followed by awkward adolescence trying awkwardly to adapt itself to mature society, with its young passions and follies, its ideals and ambitions; then it reaches a manhood of intense activities, profiting from experience and learning more about society and human nature; at middle age, there is a slight easing of tension, a mellowing of character like the

ripening of fruit or the mellowing of good wine, and the gradual acquiring of a more tolerant, more cynical and at the same time a kindlier view of life; then in the sunset of our life, the endocrine glands decrease their activity, and if we have a true philosophy of old age and have ordered our life pattern according to it, it is for us the age of peace and security and leisure and contentment; finally, life flickers out and one goes into eternal sleep, never to wake up again. One should be able to sense the beauty of this rhythm of life, to appreciate, as we do in grand symphonies, its main theme, its strains of conflict and the final resolution. The movements of these cycles are very much the same in a normal life, but the music must be provided by the individual himself. (以下省略)

又、授業の最後には表 3 に掲げた今後の勉学の心得を参考・推薦図書リスト（割愛）と一緒に配布して参考に供した。

表 3 「英語学習の心得」として配布した資料

「英文読解・表現法」を通じての『英語学習の心得』

- 出来るだけ違う種類の様々な英文を数多く読むこと（多読及び精読で）。
- 英語をやっている時の「解らない・・・？」という感覚に耐えること。
- 信頼の置ける「英英辞典」を（出来るだけ違う構成のもの複数較べて）引き込み・引き潰すこと（英和、和英、語法、その他各種辞典も用途に合わせて援用すること）。
- その際、語義中の英語や説明の「解らない」という部分に耐え、何とか他の部分とも併せて英語での理解を試み、延いては「語感」を英語で養う努力を重ねること。
- 常に「読み」を「表現」と結びつけ、表現的視点で英文を観ることに努め、これぞという表現、或いは汎用性のある表現等を盗んで自分のものにする事。
- 文法の知識を活性化すること（Try to acquire the working knowledge of grammar）。
- 語彙力を伸ばす努力を怠らないこと。
- 発音にも最低限の留意をすること。文章レベルで流暢に音読再生が出来る能力を磨くこと。
- 「4つの『き』」（「やる気」(will, drive, motivation)「根気」(patience, endurance, persistence, perseverance)「暗記」(memorization)「年季」(experience, training, apprenticeship)）を銘記して、「英語道」に精進すること。
- 言葉の背景にある文化や歴史に目を向けるよう務め、スキルも大切だが言葉を単なる道具としてのみ見ないように常に自らを戒めること。更に、日・英米等の彼一我の違いを正しく認識して、真の意味の「和魂洋才」を目指すこと（英語世界に行きっぱなしにならないこと）。「語学はファッションではない」（格好良いからやるというようなものではない!）ということを知ること。
- 出来るだけ「もの」「こと」「心」の三位一体の修得を目指すこと。

2. 平成 21 年度

基本的方向性は 20 年度と変わらないが、教科書 1 を龍口直太郎『新訂版 英文解釈読本<応用編>』から『College English 300』（プリント）に差し替えた（演習タイプの同じテキストを 2 年以上連続して使わない方が佳い）。又、授業開始時は昨年度同様この教科書 1 と 2（『和文英訳の修業（四訂新版）』）を中心に授業を組み立てたが、今年度は 5 月末からシラバスを修正し、教科書 3 の『新訂 英文解釈考』の第 1 章（「文」の構造）から第 2 章（「文意」の織りなし）までを授業時に中心的に使用した。又、教科書 4（『英文法解説』）は携行させて適宜参照用として用いた。学生に与えた具体的に与えた指示は以下の通り。

- *『和文英訳の修業（四訂新版）』基礎編 1 章は、予習として必ず本文を通読してくる。2 章以下は割愛するので、各自通読すること。
- *『新訂 英文解釈考』については、毎回丁寧に内容を検討する予定なので、語句註等も含め、例文、参考文の意味をしっかりと確認して、英文としての完全理解を目指した予習をしてくること。教室の場で指名して細かく質問をするので、誰が指名されても答えられるよう、人任せにせず各自十分に準備をしてくること。
- *尚、『新訂 英文解釈考』の第 2 章 4 節以降は、時間の都合上全て割愛するが、今後各自の必要に合わせた活用を強く望む。出来るだけ早期に最低一度は通読すること。
- *最終評価試験 and/or 課題は別途指示する。

最終評価用課題の内容も表 2 に掲げた前年度のものと同じだが、課題英文を M. Adler & C. Van Doren 著 *How To Read A Book* の指定部分に変更した。

3. 平成 22 年度

煩雑に涉るので敢えてシラバス掲出はしないが、この年度から教科書の数をプリント教材 (*The Writer's Options* (Harper & Row) という **Sentence Combining** 技能を用いたアメリカの大学等で用いられることの多い作文教材) と文法書 (江川泰一郎『英文法解説 (改訂三版)』(金子書房)) の 2 つに絞った。その背景は、4 通りのテキストを過不足無く使うことの難しさへの対処と同時に学生への経済的負担を考慮したためでもあった。授業方法は、前者は演習タイプで問題文を前もって学生が作ってきたものを授業中に検討する方法、後者については各指定個所に挙がっている例文を音読しながら文法概念の確認や表現法との関連を検討するやり方をし、その上で指定の例文を次回までに暗記して来させ、前回の分につき小テストを行なうというやり方であった。教材が拡散して取り留めが無くならないよう一冊の文法書に集中させて例文をインプットするよう仕向けた。この小テストは都合 12 回実施したが、問題形式が一番多彩な第 7 回分から数問だけ以下に掲出する (番号は振り直してある)。又、この年度から初回の授業時に「Pre-test」を実施し、今後の授業への動機付けを図ろうとした。これも後ろに掲げる。

Test for Memorization Check (7)

Date: ____ / ____ / 2010

St ID: _____ NAME: _____

★ **Either rearrange the words or supply the corresponding words according to the Japanese meaning given. Change to the appropriate verb form, where the root-form is given in brackets. Where necessary, choose and circle the most appropriate option in the parentheses.**

1. ちょうど鳥を捕まえようとした時、逃げてしまった。going, I, to catch, when, got away, was, the bird, just, it

2. 駅に着いた時、電車はもう出てしまっていた。already, got, to, left, the station, I, had, when, the train

3. 明日は彼女に会う[序でがある]から、伝言を伝えましょう。
I (see) her tomorrow, so I'll give her your message. _____
4. 少し前に出掛けました。
John [has left/ left] a few minutes ago.
5. 君はいつも僕の粗探しばかりしているね[嫌になるよ]。
You (always ; find) fault with me. _____
6. 2時からずっとあなたに会うのを待っていました。まだ待っています。
She (wait) to see you since two o'clock and is still waiting. _____
7. いつ彼に会いましたか。
When [did you see/ have you seen] him?
8. 彼女の家を訪ねると、ほんの少し前に出掛けたところだった。 **at, just, had, when, she, I, gone out, called, her house**
-
9. 彼女のご主人は10年前に亡くなっていました。
Her husband (die) ten years (_____).
10. ナンシーは今だけ親切にしているのさ。
Nancy (be) kind for the moment. _____

MINI QUIZ: Pre-test (2010/04/09)

Do You Want to Be Wise? Rich? Famous?

By

DOROTHY VAN DOREN (Editor and Author)

"God says: Take what you want and pay for it!" ---SPANISH PROVERB

When I first heard this stern proverb from Spain it frightened me; I used to dream of an Angel with a flaming sword. But as I thought more about it, I realized that the Angel held not a sword but a balance.

In one side you put what you would like to be. Do you want to be famous? Very well, says the Angel, then spend every waking hour in the pursuit of fame. It will show up on the other side of the balance in time spent and sacrifices made. Is it riches you want? Think about money every day, study it, give your life to it, and the balance will be weighted with gold—but at the cost of other things.

Maybe you want to be wise. The Angel will weigh out a high payment for that, too; it will include a good life, a pursuit of knowledge, and an uncompromising love of truth.

Everything has its price. We are familiar with this idea in our daily lives. We go to the self-service store. In our wire cart we put a can of tomatoes, a bit of cheese, bread, hamburger and spaghetti. On the way out the clerk adds up our bill, puts our purchases in a paper bag, and we carry home our dinner—after we have paid for it.

So with the balance of our lives: on one side, our heart's desire; on the other side of the scales, the reckoning. When the scales are even, you may take out what you have bought. Sometimes the price seems high. But remember, you must pay for the character and quality of your goal as well as for the achievement of it. The law is simple and it is just; you may have what you want—but you must pay. Nothing is free.

(注) **balance**: an apparatus for weighing, especially one with a central pivot, beam, and two scales; an even distribution of weight ensuring stability. **scales**: an instrument for weighing. **reckoning**: the action of calculating.

【設問】 上記本文中の下線部を和訳せよ。(解答欄以下省略)

最終評価課題に関して、今回は以下に示す通りこれまでと違ったやり方を採用した。その課題用の配付資料（今は割愛）をスケジュール表として渡し、以下の様な指示を加えた。

【前提と作業方法】

先ず原文コピーを A4 サイズのノートの左ページに貼り付け、右のページには英訳する際に必要な情報を調べて記入しておく。次の見開き 2 ページは空けてその次のページの左側に次の原文を貼り付ける。この要領で全てを貼り付け、英訳作業はその次のページから行なうこと。その際、必ずページ上余白等に作業日時を記入しておく。

1. 7月2日(金)までに、課題文(司馬遼太郎「21世紀に生きる君たちへ」)の自分なりの英訳を完成させる。その際、授業時に取り扱う部分の訳に至る作業を参考にすること。7月2日(金)の授業時にノート持参。この時原文対訳英文のコピーを配布する。
2. 7月3日(土)～7月29日(木)までの間に、原文を元に出来るだけ多くの回数英訳を試みる。*原文及び各英訳文毎に文頭に番号(①②③、etc)を付し、両者の対応を図っておくこと(原文の句点[.]を一応の区切りとするが、英訳する際に文を合併する方が佳い場合は「①+②」というような表記で対応関係を明らかにする)。
3. 英訳をし終えたら対訳模範英文と突き合わせ、自分の訳と何処がどう違うのか、違いは誤りなのか可能なバリエーションと考えられるのか、自分なりに添削作業を日記風(working log)に綴る(=作業日の日付、毎回の作業時間等を書き出す)。毎回の作業時に調べて分かったこと、感じたこと、行なった工夫等々、何でも日記風に記すこと。
4. その作業ノートを課題レポートとして7月30日(金)の授業開始時に、或いは間に合わない場合は、同日17:00p.m.(午後5時)までに教員研究室ポストに提出すること。
5. 更に、意欲ある者は、自分の作成した英文を元に和訳を試みてみて、司馬遼太郎原文とどう違った和文になっているかを検討考察する。
6. 授業の最終評価は、①この課題作業の中身と、②これまで授業中に行った『英文法解説』の小テスト、及び③同テキストの関連取り扱い章末練習問題解答済みノートの3つを合算し、総合判定により出すものとする。但し、①の作業が、これまでの「授業」内容の総決算だという位置づけにしますので、今回の作業を重視する。

以上

4. 平成 23 年度

この年度は大幅な変更を行なった。主な変更点は次の通り。先ず、テキストは 2 種類で、1) Ivan Benson, *English Grammar Workbook* (北星堂書店；コピー教材)及び2) 佐々木高政『英文構文法(五訂新版)』(金子書房)を指定した。前者は英文による文法正誤問題集からの抜粋で、後者はこれまで数年使用した同著者の『和文英訳の修業(四訂新版)』に替えて、より初歩的な構文中心の受験作文教材でロングセラーの一つである。この変更は学生の理解度の低下に基づく変更である。授業方法は、指定個所に挙がっている例文を音読しながら文法概念の確認や表現法との関連を検討し、その上で原則前回の分につき小テストを行なうやり方であり、これまで同様基本本文の暗記が求められるものであった。

Pre-test も前年度の単なる和訳ではなく、次の様により細かく文法的な理解の有無を訊く問題に変えた。

H23 年度「英文読解・表現法」Pre-test

学籍番号：_____ 氏名：_____

次の英文を読んで、以下の設問に答えよ。

Grammar is the logic of language. It is the primary, the basic structure (①) which all other devices of language are built. It is 1) what makes one language different from any other. 2) Without it, language would be chaotic, lacking clear meanings. In fact, without grammar there would not be anything we could call a "language." Any language is composed (②) individual words and (③) grammatical ways of putting these words together (④) larger meaningful combinations. 3) Words used by themselves, without orderly structure of grammar, would be merely primitive communication.

English grammar is the "English way of saying things," 4) to put the matter in a simple way. A language is differentiated from any other language (⑤) its grammar, (⑥) its particular "way of saying things." English grammar has its "way of saying things," and that is what we are concerned (⑦) in this *English Grammar Workbook*. This is a book of exercises 5) meant to test the student's knowledge of formal grammatical usage. It is not a complete treatment of grammar, but it 6) does include sections that summarize and emphasize certain English grammatical principles. The book contains, besides its material (⑧) grammatical structure, some instruction and exercises 7) concerning spelling and diction.

There are, of course, in English 8) as ▲ in other languages, variations in usage 9) depending on time (obsolete, archaic, current, and new words); place (dialects and localisms); situation (formal, informal, and vulgate). But in any use of English, the factor that changes least is the structure, the word order; that is, the grammar. Over the years, words become archaic or obsolete, and new words come (⑨) the language—but the grammar remains essentially the same. 10) Despite all the variations (⑩) the choice of words, grammar gives the language clarity and stability.

【設問】 (* 掲出に際し解答用のスペースは割愛)

1. ①～⑩のカッコ内に入るべき尤も相応しい「前置詞」を記せ。
2. 下線部1)の語を数語に展開せよ。
3. 下線部2)を和訳せよ。その際、「it」が指すものを訳語に反映させよ。
4. 下線部3)を和訳せよ。
5. 下線部4)の不定詞の用法を踏まえてこの部分を訳せ。
6. 下線部5)の分詞を適切に展開せよ。
7. 下線部6)の語はどういう働きをしているか一言で述べよ。
8. 下線部7)を、同じ意味を表す別の一語で言い換えよ。
9. 下線部8)の品詞と意味(=訳語)を記せ。又、その後ろの▲の部分に2語補うとすれば何を入れるか、その語句を記せ。
10. 下線部9)の分詞を適切に展開せよ。
11. 下線部10)を別の語句で言い換えよ。

又、最終評価用課題もこの年度から少し方向性を変更し、課題タイトルを「各自が選んだ座右の銘・モットー」(*My Life Motto/Mottoes*)として、授業で英訳練習をしている英文 Essay を参考に Essay を作成して提出させた (A4 サイズ用紙を縦にし、横書き。500 字程度。フォントサイズは 10.5 ポイント、フォントの種類は任意だが、Century で佳い、とした)。又、授業全体の最終評価は教科書『英文構成法』第二部各章末の「実力養成テスト」26 回分を冊子ノートに解答して各自添削してものと授業時に行なった英文暗記確認小テストの成績を加えて総合評価した。

5. 平成 24 年度

当該年度も大きな変更を加えた。主な点は、テキストを 1) *Harbrace College Handbook* (コピー教材)、2) *Passages Worth Reading and Appreciating for Ever-Young Minds* (コピー教

材)、3) 佐々木高政『英文構成法(五訂新版)』(金子書房)[*但し、自学自習及び提出課題用]としたことだが、1)はアメリカの大学の学部1年生が100番台の必修 College English 科目を受講する際に用いる類いのテキストで、前半が文法の確認、後半が Term Paper の書き方を扱っている大部のものだが、その中から特に文の構造、修飾・被修飾、パラグラフ概念や段落構成法に関わる部分を抜いて編集したもの、2)は当年度から準備した独自編集英文集(A4サイズで表紙、目次等含めて94ページ)である(次年度に増補改訂したので、内容構成は25年度の処で示す)。これを編集するに至った遠因は東日本大震災で、この教材の表紙に引用した詩人吉野弘の「burst 花ひらく」(詩集『消息』より)からの一節「——諸君!/ 魂のはなしをしましょう/ 魂のはなしを!/ なんとという長い間/ ぼくらは 魂のはなしをしなかったんだろう——」が、折角読む英文が精神的糧にも為って欲しいという教授者の願いを代弁するものであったことは記しておかなければならない。授業方法は、1)の教材から始めて、英文構成上の必須項目をテキスト本文の内容確認とそれに基づく各章節の練習問題をこなしながら学習する。更に、並行して2)の読解教材を読む(含、音読)ことを通じて本物の英語らしい英語の種々の文体に触れて「英語の書き言葉としての表現法」に慣れ親しみ、ひいては英文の内在化を通じて、自ら達意の英文が書ける様になるための素地の形成を図る、というものであった。又、3)のテキストを自学自習用として、第二部各章の「枠で囲まれた雛型英文例を音読して暗記するよう努める。その上で、別途にノート冊子を用意し、各章末の「実力養成テスト」(全26回)及び第三部の各項末の「実力錬磨テスト」(全10回)を本文学習後に試験と思って厳正に解答し、巻末の「解答編」と付き合わせて赤ペンで自己添削して指定された各期日にその作業ノートを提出する。」ことを義務づけて作業させた。

尚、最終評価用提出課題の内容は前年度をほぼ踏襲したが、課題タイトルを「私が尊敬する歴史上の人物」(*The Person(s) In History I Have Great Respect For*)に変更した。

6. 平成 25 年度

基本的には 24 年度と同じ内容・方法を踏襲した。但し、独自編集教材は以下に示すような内容に増補改訂した(*James HILTON, Good-bye, Mr. Chips; Anne Morrow LINDBERG, The Gift from the Sea* からの抜粋を追加した。増補分が計 18 頁で、表紙、目次等含めて 112 頁である)。今、目次部分のみ掲げる。又、授業での使用英文は一部重なるが極力前年度とは違うものを加えるようにした。採録した作品は L. Hearn の 1894 年のものから P. Kreeft の 1990 年まで 96 年、凡そ一世紀に亘るアンソロジーになっている。

CONTENTS

Lafcadio HEARN, "My First Day in the Orient".....	3
Inazo NITOBÉ, <i>Bushido</i>	9
Inazo NITOBÉ, <i>Thoughts and Essays</i>	15
Inazo NITOBÉ, <i>Editorial Jottings</i>	19
David GRAYSON, <i>Adventures in Contentment</i>	20
David GRAYSON, <i>Adventures in Understanding</i>	20
David GRAYSON, <i>Adventures in Solitude</i>	23
David GRAYSON, <i>Great Possessions</i>	24

Khalil GIBRAN, <i>The Prophet</i>	31
Martin BUBER, <i>I and Thou</i>	37
James HILTON, <i>Good-bye, Mr. Chips</i>	46
LIN Yutang, <i>The Importance of Living</i>	58
C. S. LEWIS, <i>Mere Christianity</i>	63
Gilbert HIGHET, "Training the Thinker".....	66
Gilbert HIGHET, "The Pleasures of Learning".....	68
Gilbert HIGHET, <i>The Classical Tradition</i>	72
Anne Morrow LINDBERG, <i>The Gift from the Sea</i>	75
William BARCLAY, <i>Day By Day With William Barclay</i>	81
M. ADLER & C. Van DOREN, <i>How To Read A Book</i>	91
E. H. SCHUMACHER, <i>Small Is Beautiful: Economics as if people mattered</i>	92
Arthur GORDON, <i>A Touch of Wonder</i>	95
Sydney J. HARRIS, <i>Pieces of Eight</i>	99
Peter MILWARD, <i>Invitation to Intellectual Life</i>	102
Peter KREEFT, <i>Making Choices</i>	106

最終評価課題も、各自が選んだ「人生で影響を受けた重要な言葉」(*To Ponder Over the Words of Great Importance and Influence in My Life [OR The Words that Have Influenced and Shown Me a Different Outlook on Life]*) に変更した。

7. 平成 26 年度

現在のところ最終年度になる 26 年度は、これまでの中では最も教材数の少ない年度になった。その主要因は、読解力の養成のために作った独自編集教材だが中々種類も年代も多岐に渉る多くの編を読めないのもので、読解力の訓練により多くの時間を割きたいと考えたことだが、更に 3 年前から英語専攻の学生達に必携図書として文法書や語法書を指定して購入させ、授業でも出来るだけそれらを活用するということが決まったので、差し当たりこの授業では指定文法書を常時持参させ、出来るだけ頻繁に授業中にページを繰らせて確認と連携を図ることにしたことも大きいと思う。シラバスにもその旨明記し活用を促した(「英語科指定図書の『徹底例解ロイヤル英文法(改訂新版)』(旺文社)を座右において参照し、辞書も丁寧に引いて必ずテキスト素材の英文集の指定個所の文意を掴める最低限度の予習をしておくこと)。

従って、本年度はテキストが 1) *Passages Worth Reading and Appreciating for Ever-Young Minds* (コピー教材)のみで佐々木高政『英文構成法(五訂新版)』(金子書房)を昨年同様自学自習及び提出課題用とした。又、課題作業方法も前年度と同様にした。

これらの変更を経てきて、目下の処は平成 20 年度の初年度に構想した複数テキストを併用しながら読解力と表現力を養成する、という計画は、江川泰一郎『英文法解説(改訂三版)』、佐々木高政『和英文訳の修業(四訂新版)』、或いは佐々木高政『新訂 英文解釈考』を推薦図書に回すことで辛うじて辻褃合わせをしているものの、遺憾ながら一部分は敗退してしまった感が否めないだろう。このことは後に論じる機会があると思う。尚、本年度の Pre-test は以下の様に短い段落(A~F)について文法的知識の把握が出来ているかどうかを問うものにした。以

下に抜粋して 3 問分を掲出する。

課程・コース _____ 学籍番号 _____ 氏名 _____

I. 以下の (A)～(F) のそれぞれの文章について、各々の設問に適切に答えよ。

(A) If you (ア : ask) fifty people to define love, you would probably receive fifty different answers. For ①some, love is the magical attraction between a woman and a man. ②They would describe this attraction in a variety of ways.

1. アのカッコ内の動詞を文脈上最も相応（ふさわ）しい語形[活用形]に変えよ。（以下解答欄割愛）
2. 下線部①の後に一語を補うとすればそれは何か、単語を書け。
3. 下線部②の文を、前に If ～で始まる従属節を追加する形に書き直せば、以下のカッコ内には文脈上どのような語を入れるべきか、記せ。

If they () () to describe this attraction, they would do it ~ ways.

(D) She did not want to be hurt again. Finally she accepted the lesson that life is not always fair and ① that people do not always mean what they say. Then she was able to recover her trust. A few years later, she wrote me ② that she was getting married to a wonderful man.

1. 下線部①の語は文脈上省略することはできないが、その理由を簡潔に述べよ。
2. 下線部②を直接語法的に表現する場合、以下のカッコに文脈上入れるべき語を記せ。
“() () getting married to a wonderful man.”

(F) ① Falling in love means ② discovering that two hearts can beat as if they (ア : be) ③ one. When two people are in love, they look together in the same direction (④) they share their dreams for the future. When you fall in love, ⑤ you have found your other half—your twin soul, as the Italians like to say. You know that two halves form a perfect whole.

1. 下線部①を、同じ意味になる別の表現形式に変えよ。
2. 下線部②を、同じ意味になる別の表現形式に変えよ。
3. カッコ内アの原形動詞を文脈上最も相応（ふさわ）しい語形[活用形]に変えよ。
4. 下線部③の後に一語を補うとすればそれは何か、その語を書け。
5. カッコ④に入るべき接続詞を書け。
6. 現在完了時制に留意しながら、下線部⑤を適切な日本語に訳せ。

又、最終評価課題も前年度通りで「人生で影響を受けた重要な言葉」(*The Words that Have Influenced and Shown Me a Different Outlook on Life*) とした。

III. 英文読解・表現法と“Cultural Literacy” in English という問題

E. D. Hirsch の “Cultural Literacy” という問題提起は、1980 年代後半の時点で、アメリカの初等中等教育を俯瞰して、それ以前の半世紀に垂んとする学校教育が積み上げてきた（と彼には見える）、ルソーの啓蒙思想に強い影響を受けた J. デューイのプラグマティズムの思想に則った教育の負の遺産としての問題点を洗い出し、その過つところを矯め直し、足らざるところ

ろを補うには如何すれば佳いか、如何に教育的環境に恵まれない学力低下にずっと押し込まれている教育的マイノリティ層を救済するか、又、それだけでなく上位の優秀な学力保持層も次第にカリキュラムや指導の不備により、特に 70 年代から 80 年代後半までに学力低下が顕著になり、社会全体としての教育力低下により企業等においても中間管理職同士や普通の労働者間の意思疎通が旨く行かず、結果的に企業の国際競争力や業績低下をも来している事等を承けて、Hirsch らの主張する一連の教育改革を実行することを通じアメリカの国力をこの衰退からどうやって救うか、という観点で提唱された理念と方法論である。彼の著書は、教育社会学的考察にも満ちていて、アメリカの公教育の様々な問題点の分析や教育改革の方向性について論じている訳だが、我々にとってはそのこと自体への関心もさることながら、これを日本人の立場に置き換えた時にどういう状況が見え、何を学ばなければならないか、のヒントを得ることの方が一層大切だと思われるし、ある意味間接的ではあっても切実な問題提起だろうとも考えられる。

しかし、そのことは本稿の主論点ではないので一先ず措くとし、今はこの“Cultural Literacy”という概念を日本人の英語学習一般にとつての重要なヒントという視点で捉えた時に何が見えてくるか、を考えてみたい。Hirsch らは自らが後年編集した *The Dictionary of Cultural Literacy* の中にも“Proverbs”、“Idioms”、或いは“Conventions of Written English”という章を設けて英語そのものに関係する事項を多数取り扱っていて、それらも勿論我々英学徒にとって必須の内容だと考えられる。しかし、それらの章は、“The Bible”、“Mythology and Folklore”、“World Literature, Philosophy, and Religion”、“Fine Arts”等の章共々、元々はアメリカ人にとって必須の Cultural Literacy 項目として挙がっているものである。

当然それらも英学徒の知っておくべき内容ではあるが、寧ろ今我々が考えたいのは、それとは些か違った、より英語学習にとって基礎的な部分を含む概念や背景知識 (Cultural Literacy in English) であつて、そのことを引き出す前提として Hirsch らの Cultural Literacy の概念を援用しようと考えている。そして、そのことと「英文読解・表現法」との関連をも考えてみたいと思っている。

Hirsch(1987)は、読書力研究の専門家 Jeanne S. Chall が読み書き技能を伸ばすために必要な知識を“world knowledge”(「世間知、回りの世界についての知識」と呼んでいるものが、自分が“cultural literacy”と呼ぶものである、と述べた上で、それは「つまり、全ての読書能力に長けた人が所有している情報網であつて、それが故に新聞を手にとつても相応しい理解力で読むことができ、要点を掴み、言外の意味をも把握し、今自分が読んでいるものと文面に述べられてはいないけれどもそのみが目下読んでいるものに意味を与える文脈とを関連づけることが出来るような、そういう人達の脳裡に蓄積された背景情報である」と敷衍している (p. 2)。

1

又、H. Bradley や O. Jespersen と言語学者の考え方に基づいて、その「情報網」や「背景情報」を担保してくれているのが話し言葉も含んだものとしての“standard written English”というものであると述べ、更に読み書き能力の主な機能は、使用者をしてこの“standard written English”という知識と伝達のための標準的道具を自由に操れる存在にすることであつて、そうすることで使用者が時空を越えて話し言葉と書き言葉の双方において複雑な情報をやり取りす

ることが可能になるのだ、と言葉を継いで説明している (p. 3)。²

そして、「他人の云うことを理解するためには、語が表面上意味する以上のことを理解しなければならぬし、文脈[脈絡]をも理解しないとイケない。背景情報が必要だということは読み書きには一層当てはまることで、1 ページに載っている単語 (から為る文や文章) を把握するためには、そこに書かれていない多くの情報を知っていないとイケないのだ」(p. 3) と述べ、「文化的識字率 (= 教養) というのは、誰もが持っている日常生活レベルの知識以上ではあるが、専門家だけしか知らないというプロレベルには届かないもので、「普通一般の読者」が持っている文化的知識に相当する両レベルの中間の立場であって、我々がこれまで伝統的に子供達が学校で受けることを望んできた情報を含んでいるのだが、現在では最早学校で教えられない類いのものである」(p. 19) とも批評している。³

更に、Hirsch, et al. (1988) では、「序文」において、この辞典 (= 事典) の利用者向きに一層平易な云い方で辞典の意義を強調し、構成員が意思の伝達を図り、共に働き、共に生活するための「言語共同体が共有すべき共通の知識や集合的記憶や背景情報の重要性」という理念的な面に説き及んでいる (pp. x~xi)。⁴

又、「辞典の理論的背景：Cultural Literacy と教育」という解説文の中で「読書力・読解力」に関しても Cultural Literacy との絡みで種々コメントしているが、要約すると、ある人が本当に読解力があるかどうかを計るには、その人がどれ位容易且つ正確に多様な種類の文章を理解できるかを診ればよいということだし、十全で全般的な読書力を持つためには、多くの事について知る必要があるし、多くの語を知っているということはすなわち、多くの物事を知っているということになる。なぜなら、語は物に言及するものであり、言語技能とはつまり知識技能でもあって、物を学ぶことと読むこととは、書き手と読み手或いは教え手と学び手との間でどれ位の背景知識が共有されているかに大きく影響されるからである。その意味で、読み書き能力を下敷きにする国語や文化は正に「学校を通じて代々伝えられる文化」と云える。そういう読み書きに基づく文化の伝統的な参照点を各学校が (しっかり) 伝達すれば、誰でも未知の他人とであっても意思伝達ができる。正に「他人と効果的に意思疎通ができる能力」というのが (cultural) literacy に相応しい定義である、ということになるか (pp. xiii~xvi)。⁵

より具体的に云うと、Hirsch らは、小中学校での読書指導において、一見妥当で何も問題がなさそうな「技能本位」で「(その学年に) 相応な ; 今日的で実際の」教材を用いるという方法が実は学力衰退の主要因であり、このやり方では早い段階のカリキュラムから伝統的な歴史、神話、文学といった、謂わば「不易な」教養的文化教材が結果的に掃討されてしまうことになり、その大いなる過ちがずっと長年に亘って踏襲されてきていることが問題なのだ、と鋭く批判している。又、その延長線上で、昔話や神話などよりも現代的な教材の方が生徒にとっては興味関心を引くだろうという理屈で初歩段階の教科書が常時改訂されているが、それは恰も読み書きや意思伝達というものが特定の教養的内容とは全く無縁なまま形式的な言語面の技能として完結し得る、という (誤った) 考えに支配されているのである、とも断定している (p. xv)。⁶

6

こういった “cultural literacy” の考え方を、日本の学校教育の中で英語を教え学ぶ際の状況に置いて考えてみると、勿論 Hirsch 達が云うように、人文・社会・科学等に関する一般教養的

知識を教材にできるだけ適切に配置し、詳しい内容までではなくとも、事柄がどのようなものであるのか、どのような言葉が様々な領域分野で用いられる基礎語彙なのか、というようなことを身に付けておくことが、将来の読書力・読解力を伸ばすために重要だということは想像に難くないであろう。只、そういう一般教養的な内容や用語は、日本語での理科や社会等の各教科において学ぶ内容とも重なる部分が多いであろうから、勿論、その全てを英語教科の中で取り扱わなければならない、ということは意味しない。一言で言えば、“The more, the better.”ということである。

目を英語そのものに転じて考えてみると、**cultural literacy in English** と云えるものは何であろうか？ 先ず、**Hirsch** 達の考えに則れば、程度の差はあれども、英語が言語として受け継いできている伝統的な人文的内容（宗教や神話や哲学や文学）は美術や音楽の普遍性と比べればより限定的であり、他の教科目の中では教えられないことが多いのではないか（哲学は倫理社会で多少は扱われるだろうが）？ 英語国民の物の考え方や思想といったものは、英語という言語の表現方法と不可分であるが、日本語とは遠いものである。そういう部分は積極的に取り入れて学ばなければならないであろう。つまり、言語としての英語の構造や発想・表現法を、英語国民の書き表した良質の作品を読むことを通じて体得すること（時事的、日常的素材を全否定するわけではないが）、「技能修得を内容と分離させない学習法」が極めて重要になってくる、ということである。我々には英語母語話者が母語習得に掛けるのと同じ時間的余裕はないという厳然たる事実を受け入れるべきであり、たとい小学校に英語を教科として下ろし早期教育をしようとも、それでも匹敵するほどの総量になることはない、と悟るべきである。寧ろ、いくら時代錯誤だと云われようとも、**Hirsch** 達が英語国の児童生徒に施すべきだと主張する **cultural literacy** に該当する内容に近づけながら、「不易な」英語の構造理解や語彙の拡張を図ってゆくべきではないだろうか。一にも二にも読むことであり、昔ながらの「精読」と「速読・多読」の両面が必要であるが、学校教育においては基礎基本となる「精読」の意義を再確認することが大切である。その際に、「不易な」教養的文化教材として英語における **cultural literacy** を踏まえた内容を取り上げるようにすることが、一見迂遠のように見えて却って確実に英語という言語と発想表現法を理解し運用してゆくことに繋がって行くのではないだろうか。「英文読解・表現法」で目指したことは、正にそういうことだったのである。

IV. 「英文読解・表現法」の目指してきたもの：纏めとして

上述の通り、この「英文読解・表現法」で目指してきたものは、かつて 1960 年代から 70 年代一杯くらいまで健在で建前としては皆がそれを等しく勉強したことになっていた、かつての受験英語で取り扱われたレベルの英語力 (**cultural literacy in English**) を出来るだけ回復するということであった。時代錯誤と批判されるのを覚悟で、「最低でもこのレベルの英文読解力や文法力をお温習いしてから大学レベルに行こうじゃないか」、というのが端的に云って前提されていたことであった。その当時の受験英語が最高だとか立派だとか云うのではなく、それ位のレベルを最低限に設定しないと、文学でなくとも少し古い文献は読めないし、ましてやそこ

そこまともな英文も書けない。謂わば実社会に出てもモノの役に立たない英語運用能力にしかならないのである。中学高校の英語教師として、英会話だけ出来れば事足りるということはある得ないし、その会話力のためにさえ、実は堅固な発音・文法・語彙等々の基礎体力となる英語力によって裏打ちされていなければ本物とは云えないだろう。一見無縁とも思われそうな文学哲学思想的エッセイや最近の息の短い口語短文英語ではお目に掛ることもないような息の長い文の集積としてのパラグラフからなる英文も、それを辞書や文法書の助けを借りて丹念に読み解こうと努力すれば、その結果文構造が判り応用が利くようになってくるのである。又、そういうやや硬い書き言葉の短文であっても暗唱用文例としてインプットして仕入れておけば、先になって英語で自己表現しなければならない時に形を変えて必ずそれが生きてくるであろう。そういう「時代を超えた普遍的で不易な必須の英語力」を身に付けて欲しいという願いにも似た気持ちが教授者の意識の背景にあったと云って佳いであろう。又、教育には発酵作用或いは「啐啄の期」を待つ必要もあるのである。それを教えてくれるのが、これに尽きるというのではないが、この授業で指定した、今でもロングセラーを重ねている良質のかつての受験参考書類だと確信している（それらの中で絶版になっていた幾つかは近年多くの希望を基に復刊されてもいる）。旧い新しいを云う前に、昔の辞書の宣伝文句ではないが、「シェイクスピアからコンピュータまで」あらゆる英語の基礎になる部分をこそ学校教育の中で身に付けさせなければならないのであり、そのためには時間は足りないのである。応用はその後からででも少しも遅くはないであろう。

結果的にこの授業が如何であったか、はシラバスの変遷を検討すればある程度は自ずと見えてくるのだが、入学学生が所謂「ゆとり世代」やそれ以降になって来て、教科書に指定した受験参考書の日本語の解説文すら難しいとの声を聞くと、まして英文は況んやをや、という感じになってくる。それでも何とかこのレベルを維持するよう努めはしたが、どうしても次第に消化不良にならざるを得ない状況となり、テキストの数を精選して減らすなど別の工夫をするしかなくなってきた面は否めない。

E. D. Hirsch, Jr.らの提唱した“Cultural Literacy”が云う「共同体共有背景知識」を文化的識字率或いは教養と呼ぶとするならば、今の大学生はかつての英学徒共同体との間で *cultural literacy* をそれ程多く共有できていないと云わざるを得ない。こうしたかつての受験英語が提供していた、謂わば“Cultural Literacy in English”というものこそ、我々がテキストに選んで学習するように仕向けたロングセラーの良質な受験参考書が提供してくれているものの重要な一部分なのではないだろうか？

確かに、言葉は世につれて変わって行くものであるから、遙か昔のシェイクスピアをいくら読んで精通してもそれで「使える英語力」が付くとは云えない、というのも確かに一説だろうが、突き詰めればそれも実は怪しい理屈かも知れず、沙翁まで歴史を遡らずとも、19世紀や20世紀初頭の少々古い英文を読むよりも、活きの良い現代英語の雑誌・新聞・メディア英語を勉強する方が、或いは英検や TOEIC に代表される検定英語ならば就職にも有利に働かし、何れにせよそれらは今直ぐ使える英語力の涵養に繋がるわけだから即戦力ではないか、何故そういう使える英語を教えないのか？！というのが、経済界や日本社会の大方から日本の英語教育界に事ある毎に突きつけられる永遠の課題なのである。事程左様に英語のこととなると世は喧し

い限りなのであるが、しかし、本当に我々は今のような方向に英語教育の舵を全面的に切って、これまで不易なもの或いは Cultural Literacy in English が担保してきた部分を等閑視するようなプログラムやカリキュラムを高等教育機関である大学の教育の基本にまで据えて善いのであろうか？

「温故知新」に話を戻せば、これは視点を変えれば「不易と流行」の問題でもあると云えるであろう。どんなに世の中が緩くなって英語のレベルが易しくなってきたとはいえ、変わらざるべき不易の部分は存在するのであって、目先のものの為に不要なら本当にそれは要らないのか？という議論や推考なしに、湯水と共に流してしまってよい赤ん坊ではないのではないのか？勿論一定の幅はあるにせよ「実社会で通用する[している]程度の英語」というのは厳然として存在するのではないのか？温故知新はそれを教えてくれる殆ど唯一の心構え或いは方法だと現筆者には思える。義務教育であれそれ以降の高等教育であれ、なにかんづく現下の大学が置かれた状況においては、限られた時間と人材の中で「一生モノの英語力」を学生に修得させるために何が必須なのか、を試行錯誤しながらでも考え続け実践し続けて行かなければならない。「英文読解・表現法」の授業実践が示唆するものがその為の一助となることを切に願っている。(了)

註

1. "...namely, the network of information that all competent readers possess. It is the background information, stored in their minds, that enables them to take up a newspaper and read it with an adequate level of comprehension, getting the point, grasping the implications, relating what they read to the unstated context which alone gives meaning to what they read."
2. 本文では要約的に示したが、次の原文を参照。"Linguists have used the term "standard written English" to describe both our written and spoken language, because they want to remind us that standard spoken English is based upon forms that have been fixed in dictionaries and grammars and are adhered to in books, magazines, and newspapers. Although standard written English has no intrinsic superiority to other languages and dialects, its stable written forms have now standardized the oral forms of the language spoken by educated Americans. The chief function of literacy is to make us masters of this standard instrument of knowledge and communication, thereby enabling us to give and receive complex information orally and in writing over time and space."
3. "...to understand what somebody is saying, we must understand more than the surface meanings of words; we have to understand the context as well. The need for background information applies all the more to reading and writing. To grasp the words on a page we have to know a lot of information that isn't set down on the page." / "Cultural literacy lies *above* the everyday levels of knowledge that everyone possesses and *below* the expert level known only to specialists. It is that middle ground of cultural knowledge possessed by the "common reader." It includes information that we have traditionally expected our children to receive in school, but which they no longer do."
4. 以下、関連部分を参考までに列記する。"Although it is true that no two humans know exactly the same things, they often have a great deal of knowledge in common. To a large extent this common knowledge or collective memory allows people to communicate, to work together, and to live together. It forms the basis for communities, and if it

is shared by enough people, it is a distinguishing characteristic of a national culture. The form and content of this common knowledge constitute one of the elements that makes each national culture unique.” / “It is our contention that such a body of information is shared by literate Americans of the late twentieth century, and that this body of knowledge can be identified and defined. This dictionary is a first attempt at that task. It identifies and defines the names, phrases, events, and other items that are familiar to most literate Americans: the information that we call cultural literacy. Although few of us will know every entry, most of us will be familiar with the majority, even if we are unable to define each one exactly.” / “Cultural literacy, unlike expert knowledge, is meant to be shared by everyone. It is that shifting body of information that our culture has found useful, and therefore worth preserving. Only a small fraction of what we read and hear gains a secure place on the memory shelves of the culturally literate, but the importance of this information is beyond question. This shared information is the foundation of our public discourse. It allows us to comprehend our daily newspapers and news reports, to understand our peers and leaders, and even to share our jokes. Cultural literacy is the context of what we say and read: it is part of what makes Americans American.” / “By definition, cultural literacy falls between the specialized and the generalized.”

(“INTRODUCTION”)

5. 以下、該当箇所を引いておく。“The true measure of reading ability is the ease and accuracy with which a person can understand *diverse* kinds of writing.” / “To have a good *general* reading ability, you need to know about a lot of things.” / “Knowing a lot of words means knowing a lot of things. Words refer to things. Language arts are also knowledge arts.” / “I am led to the conclusion that both learning and reading are powerfully affected by the degree to which background knowledge is shared between writer and reader, and between teacher and student. To learn well, I need to know a lot, but I also need to know the specific things that enable me to read between the lines.” / “Literate national language and culture are what Ernest Gellner aptly calls *school-transmitted* cultures.” / “If each local school system imparts the traditional reference points of literate culture, then everybody is able to communicate with strangers. That is a good definition of literacy: the ability to communicate effectively with strangers.”
6. “One important cause of the decline has been the use of “skills-oriented,” “relevant” materials in elementary and secondary grades. The consequent disappearance from the early curriculum of literate culture (that is, traditional history, myth, and literature) has been a mistake of monumental proportions. Modern basal readers constantly update the content that young children are taught, under the theory that modern materials will be of greater interest to them than older stories and myths, as though reading, writing, and oral communication were formal skills that could be perfected independently of specific literate content.”

参考文献

(*本文中に挙げた教科書類は以下には再掲しない。)

荒牧鉄雄『新版 現代英文解釈』三省堂, 1970.

-----『現代英文法 第4版』三省堂, 1979.

伊藤和夫『英文解釈教室』研究社, 1977; 1997[改訂版].

-----『予備校の英語』研究社, 1997.

- Highet, Gilbert. *The Art of Teaching*. Alfred A. Knopf, 1950.
- *The Immortal Profession*. Weybright and Talley, 1976.
- Hirsch, Jr., E. D. *Cultural Literacy*. Houghton Mifflin Co., 1987.
-, J. F. Kett, & J. Trefil. *The Dictionary of Cultural Literacy*. Houghton Mifflin Co., 1988; 1993².
- *The New Dictionary of Cultural Literacy*. Houghton Mifflin Co., 2002.
- [事実上、上記の第3版]
- 國弘正雄『英語の話し方』サイマル出版会, 1970. (『國弘流 英語の話しかた』たちばな出版, 1999 は実質その改訂版)
- 林語堂 (Lin Yutang) (山田和男 訳)『開明英文文法 ---表現の科学--- (Kaiming English Grammar)』文建書房, 1960.
- 斎藤兆史『英語達人塾』中公新書, 2003.
- 佐々木高政『英語の学習 20 の階段』金子書房, 1958 ; 1987 (新增補 34 版) .
- 佐山栄太郎『最新英文解釈 (第三改訂版)』研究社, 1967.
- 篠田錦策・佐々木高政『和文英訳十二講』洛陽社, 1954 ; 1968².
- 柴田徹士・藤井治彦『英語再入門 読む・書く・聞く・話す』南雲堂, 1985.
- 多田幸蔵『解釈のきめ手 英文研究法』洛陽社, 1999[改訂版].
- 山口俊治『全解 英語構文』語学春秋社, 1986.
-『英語構文全解説—The Perfect Study on ENGLISH SENTENCE STRUCTURES』(復刻版) 研究社, 2013.
- 山崎貞『新々英文解釈研究 (第九訂版)』研究社出版, 1979. [2008 年に 1965 年発行の「新訂新版」が復刻版として復刊]
- 吉川美夫『増補改訂 新英文解釈』文建書房, 1957.

(2015 年 2 月 2 日受理)